

---

# ファンタシースターポータブル2i ~ 異世界の5人 ~

サイクロン&ハリケーン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ファンタシースターポータブル2i 異世界の5人

### 【Nコード】

N4736Z

### 【作者名】

サイクロン&amp;ハリケーン

### 【あらすじ】

それは遠い星のお話。軍事会社リトルウィングにルーク・ファイルンという青年がいた。彼は亜空間事件を解決した英雄である。

そして欠片事件から半年後がたったある日、何やら怪しい5人がある会話をしている。彼等は何者なのか、まだ知るのは先の事であった。

リトルウィングを飛び出したルークは、ルークの妹、弟に3年ぶりに再会する。そしてルークは自分の本名である、ディオ・ルタ・

オルテガとして、生きること決めた。そして、ディオオンと話をし  
てる途中にソロから通信が入る。その内容はグラールに関する事だ  
った。

## ブログ：謎の5人（前書き）

初投稿です。自信がないですが、どうぞ御覧ください（ちなみに主人公はまだ出ません）。

## プロローグ：謎の5人

? 「ここは、どこだ？」

? 2 「どうやら成功したみたいだね。」

? 3 「ああ、そのようだな。」

? 「失敗するかと思っただが・・・、何もなくて良かった。」

? 4 「失敗するわけないツスよ。俺が造ったんツスよ」

? 5 「その様なしゃべり方だから、そう言われるんだ。」

? 2 「でも、彼の腕はたしかだよ？」

? 4 「良いこと言ってくれるじゃないツスカ。」

? 「そんなことより、本当に大丈夫なのか？」

? 5 「ああ、大丈夫だ。準備はできてる。俺達の目的を達成させよう。」

? 「ふっふっふ、そうか。」

? 3 「時間もなし、もう行こうぜ。」

? 2 「そつだね。」

? 5 「まてよ、先々行くのは良くない、そつだなま<sup>ず</sup>ずは・・・。」

## ブログ：謎の5人（後書き）

うーん、とりあえずここまでですね。誤字、脱字がありましたら、教えてください。

## 第一話：依頼 1（前書き）

続けて投稿です。前は会話だけだった。でも後悔はしていないようなあるような。

まあ前は気にせず御覧ください。



## 第一話：依頼 1

「マイルーム」

ここの部屋に1人の青年がいた。彼の名はルーク・フィレン、亜空間事件を解決した英雄である。だが、今は彼はベッドで寝ている。病気出もなく怪我したわけではない。彼に取って久しぶりの休日になる……はずだった。

コンコン

「はい。」

「ルーク？いる？」

「（うるさいのが来たな）ああ」

扉が開き姿を見せたのはエミリアだった。

「何よ、その返事は？」

「別に（言ったら殺される）で、何のようだ？」

「うーん、実はさ。あんたにお願いしたい事があるの」

「なんだ？」

「実はナギサに声をかけたんだけど、依頼が入っていけなくなった

んだ。」

「んで？」

「だから、あんたに来てもらいたいんだ」

「どこに？」

「依頼」

「依頼？・・・悪いが、今日は俺は休・・・」

「お父さんに声を掛けたら、ルークと行けと言われた」

「おいおい・・・」

「ルーク・・・お願い」

少し考えて、ため息を付き

「わかったよ。付いて行けばいいんだろ？」

と答えエミリアが笑顔で

「ありがとう」と答えた。

「やれやれ」と言いながらベッドから出でる。

「依頼内容は？」とエミリアに聞く。

「うーん、何かパルムで不審な5人を見たんだって。」

「その5人を何者が調べると。」

「そう、その通り」

「さっさと終わらせよう。せつかくの休日なのに仕事するなんて」

「ぶつぶつ言わないの。はやくい」

「やれやれ」呟きながら、部屋を出た。

## 第一話：依頼 1（後書き）

やっぱり小説は難しいですね。でも頑張ります。  
・・・うん、頑張る

## 第一話：依頼2（前書き）

少し編集しました。

ルーク「編集して、余計変になっただんじやないのか？」

そ、そんなことないさ・・・。

## 第一話：依頼2

〰️パルム草原〰️

依頼を受けたエミリアと無理やり依頼を受けさせられたルークがいた。

「エミリア？ここに依頼にあつた不審な5人を見た場所か？」

「うん。そうだけど、誰もいないね？」

「だが、油断はするなよ。いきなり襲つて来るときもあるからな。」

つとエミリアに注意を促した。

「わかった」つと返事をするエミリア。

「とりあえず、辺りに誰かいないか、搜索するか。」

「そうだね、まずは人を探さな・・・」

「！！？エミリア！！伏せろ！！」と叫ぶルーク。

「え？」

「ちっ」とエミリアを無理やり右に押す。

「痛っ」と地面に尻餅をついたエミリアが声を出す。

「くそ、どこからだ」辺りを見渡すルーク。っとそこに。

「あゝあ、外しちゃった。結構自信あったんだけどなあゝゝ。」  
と声がした。

「誰だ!!」っと声がした方向に声を出した。

「普通、自分から名乗るものでしょう? 礼儀をしないの?」

「なに?」

「いたたたっ」お尻を擦りながら立ち上がるエミリア。

「大丈夫か。エミリア?」

「人を押し倒しといて、その台詞言っかな? まあ大丈夫だけど。」

「わりい、その方法しかなかったから。」

「いやいや、その他にも方法があるでしょう!？」

などの会話をしていると、

「何? 漫才でもやってるの? あんまり面白くないよゝゝ」

「姿を見せないお前に言われたくない。っていうか漫才なんてして  
いない」と声がする方向に喋る。がしかし、

「どこ見て喋ってるの、後ろだよゝゝ。君の後ろ」

「！！!?」と振り向く2人。

「いつからそこに？」っと、ルークが質問をする。

「『お前に言われたくない』って辺りかなあ〜?」

「うつつ、何かしゃべり方が腹が立つ。」っとエミリアが言う。

「あははは、いい慣れてるから、痛くも痒くもないよ〜。どう?  
?余計に腹が立ったでしょう?」

「それより、どうやって後ろに？」ルークが質問をする。

「あまり腹が立たなかったみたいだね〜、まあ、いいや。それより  
答えないとね〜、君の質問に〜。簡単だよ〜。僕ちんの特殊能力だ  
よ〜。」

「特殊能力?」

「特殊能力って言っても、ピンと来ないと思うよ〜。まあ、さらに  
簡単に言つとね〜、・・・僕は普通の人間じゃあないんだよ。」  
言い方が少し悲しそうに話す。

「えっ?」

「でも・・・、どうでもいいことだよねえ〜。おっと忘れるとこ  
ろだったよ〜。」っと、何かを思い出したかのように、背筋を伸ば  
して喋る・・・が。



「実はさ、君達にお願いがあるんだ」全く礼儀のない言い方で  
ルークに言う。

「誰がお前のお願いを聞くもんか。」っと、そう答えるルークに。

「ほんと。襲撃しといてなによ、それ？しかも、礼儀がまったくな  
いし」

エミリアもそう答える。

「困っている人を助ける仕事なんでしょう？助けてよ。子供だ  
よ？僕ちゃん」

「子供も大人も関係ない。襲撃した理由を聞き出してやる。つてい  
うか自分からいうか？『子供だよ？』つて」つと言いながら、シッ  
プウジンライを構える。

「子供だから、子供つて言っただけだよ。それよりなに？子供  
に武器使うの？大人げないなよ？ま、武器を使っても君は勝て  
ないけどね」

つと言いながらせロセイバーを構える。

「エミリア！！下がってろ！！」

「ルーク、あたしも戦うよ」

「パートナーの言う事聞くもんだよね。って君が戦っても足手まといになると思うよ。」

つと笑いながら言う。

「うつさい、あんたに聞いて……」

「エミリア。下がってる……大丈夫、そう簡単にやられないさ。」

「つと真剣な顔でエミリアに言う。エミリアも観念したのか、

「わかった。」つと、答えた。

「さてと、準備はいいか？」つと子供に言う。

「僕ちゃんは、いつでもいいよ」。あ、そうそう、僕ちんの名前はミケ。ミケ・ラン・ジャータン」

そしてミケはルークに飛び掛かる。

## 第一話：依頼2（後書き）

とりあえず、ここまで。

ルーク「やっぱり、内容が」

誤字、脱字がありましたら教えてください。

ルーク「無視するなよ」

## 第一話：依頼3（前書き）

初戦闘シーンです。

ルーク「俺の出番が多くなるわけだ（内容は心配だけど）」

では、どうぞ

### 第一話：依頼3

「ふっ、遅いな」つといきなり飛び掛かるミケに対し、右側に避け、ミケに攻撃の体勢をしようとした時、

「君がねっ」つと言った瞬間、地面に左手を付き、左手をグイッと地面を押し飛び上がり、ゼロセイバーをしまい、インフィニットブラスターを構え、ルークに射つ。

「!!!!」

攻撃の体勢に入っていたせいか、顔を左に避ける事しか出来ず、2つの弾の内、一発頬にすれた。そして、そのすれた所から血が出てきた。

「ルーク!!」つと叫んだエミリアが戦いに加わろうとしたが、

「下がってろっっていただろ!!」つとルークが叫ぶ。

「あんな奴、1人で戦おうなんて、言う方がおかしいよ!!」

「あははは、仲間割れしてるっ」つと地面に着地していたミケが、いつの間にかインフィニットブラスターをしまい、ゼロセイバーを回しながら、嘲笑う。

「ちっ、調子に乗りやがって」

「ルーク!!」

「……。分かったよ、だが、無理だけするな」

「あんたも、無理はしないでよ」

「ああ、分かった」

「あちやゝ、2対1になっちゃったゝゝ。でもねゝ、僕ちゃんはねゝ、2対1でも勝てるんだよねゝ。」ゼロセイバーを回しながら言う。

「その自信、いつまで続くと思うなよ」

「パートナーに『下がってる』といった奴がそのセリフって……あははは、変なゝゝ。」

「お喋りは、ここまでだ」っとミケに睨み付け、シップウジンライをしまい、アカツキ・印を持ち、ミケに向ける。

「あたし達をあまりなめないで」クラール・リタ・ヴィサス？を持つエミリア。

「別になめてないけどなゝ、」っとまだ嘲笑ってるのか、ゼロセイバーを回してる。

「その言い方とその態度が腹が立つっての。」っとエミリアが言う。

「あつ、そうなんだゝ、だったらねえゝ」っとゼロセイバーを回すのをやめ、

目をつぶるミケ。そして・・・ゆっくり目を開け・・・

「・・・、普通に喋ればいいんだね」っと言い、ゼロセイバーをしまい、何やら構えをとり、そして・・・。

「じゃあ、戦うことも普通にいかせてもらっよ。もう手加減なしだよ！！本気でいくからね！！」っと言った瞬間体が光始めた。

「「！！！！」」

2人が驚く。

2人の前に姿を表したのは、暴走中のナノブラストの姿であった。

「ばっ、バカな」っと思くルーク

「嘘でしょう！？何でヒューマンがナノブラストができるのよ！！」っと思くエミリア。

(言い忘れましたが、ミケはヒューマンです)

「言ったはずだよ、僕は普通の人間じゃあないって、あと1つ言っとくけど、僕のナノブラストは時間制限はない。僕のナノブラストを止めることが出来るのは」

「お前を倒す事だ。」

「そのとおり。それと、自分の意思でも止めることも出来るんだ。さてと、お喋りは終わりだったね。じゃあ望み通り終わらせてあげよ。君達が死ぬことで。」っと思くルークに飛び掛かりあつという間

にルークの目の前に来ていた。

「!?(速い)!!」と思ったルークだが、

ドン!!

腹に蹴りを入れられ、吹っ飛ぶルーク。

「グッ!!」ルークが飛ばされる。

しかし、凄いスピードでルークに追いついたミケがルークを踏み台にするかのように、おもいきり腹を踏む。そしてルークが地面に叩きつかれる。

「ぐぐはぁッ!!」地面に叩きつかれたと同時に口から血を出す。

「ルーク!!」っと近寄るが、

「……終わりだ、ルーク……」っと言い残しルーク止めを指そうとしたが、。

……。

「言っただろ?お喋りは終わりだって。」っとニヤリと笑ったルーク。

「ばっ!!!!」っとびっくりしたミケ。その訳は……ルークがアカツキ・印で攻撃を防いでいたのだ。





何かを察知したミケだが、気付くのが遅く何かにぶつかり、遠くに吹っ飛ぶミケ。それはエミリアが放ったミラージュブラスト、コンル（氷刃ノ疾風）だった。

遠くに飛ばされた先には、大きな木が一本立っており、その勢いのまま、ミケは木に叩き付けられた。

バツキイイイ〜ツ

つと木が折れた音がし、勢いが強かったせいか、そのまま木を通り越し、折れた木を少し離れた所で、地面に落ちた。

「ふう〜。・・・（・・・終わったかの？）」「つと警戒をルークは息を吐く。

「ルーク！大丈夫？」

「ああ、何とか。しかし、エミリア？なぜブラストがたまってたんだ？」

「ああ、それ？実はバスクからもらったのを食べたんだ。これだよ。」

「ん？そのクッキーみたいなやつ？」

「そうだよ、これ美味しいんだよ。」

「まあ戦闘中に食べるのはどうかしてるが、とにかく助かったよ。ありがとな、エミリア。」つとエミリアにお礼をするルーク。

「最初の言葉が気になるけど、まあいいか。」っと笑うエミリア。

「ふふっ」っとつられて笑うルーク。

「あつ、それよりルーク？あいつどうする？」っとルークに聞く。

「そのままにしとくのは、あれだしな。とりあえず連て帰るか。」

「えっ？」っとエミリアが言った時、

「くっっ」

「「！！！」」

「ま・・・まだ・・・まだだ・・・僕は・・・まだ・・・負け・・・てない・・・」かなりフラフラになりながら立つミケ。あまり力が無いのかナノブラストの状態ではない。

「「・・・・・・」」

そのミケを見たルークとエミリアがそれぞれ違う反応した。

「やれやれ」っとルーク

「あれだけ、やられておいてまだ立つかな」っとエミリア

「さあ、こい」っと言うミケだったが、その時。

？「あつ、見つけたぞ、ミケ。」

？2「あの野郎、またやりやがったな。」

「！！！」

その声に驚いたルークとエミリアは、声がしたほうを見た。そこには、2人が歩いてくる。1人はミケと同じヒューマンで18〜19歳ぐらいの背の高い青年。もう1人はデューマンで15〜16歳ぐらいのなかなか背の高い少年がやって来た。

## 第一話：依頼3（後書き）

誤字、脱

ルーク「ちょっと、いいか（怒）」

あれ？何で、怒っ

ルーク「ミラージュブラスト！！！」

ぎゃ~~~~~。

エミリア「誤字、脱字があったら教えてね」

そ……それ……俺の……セリフ……

## 第一話：依頼4（前書き）

何回も読み直したから多分大丈夫です。

っと言っておきながら、少し訂正しました。

ルーク「また、訂正するんじゃないか？」

そ、そんな事はない、……うん。

ルーク「はあ〜」

## 第一話：依頼4

18〜19歳ぐらいのヒューマンの青年が、ルークとエミリアに近づく。

？「すみません、僕の弟が迷惑をかけましたか？」

？2「兄貴、ミケのあの姿とこの2人の疲れ具合を見る限り、迷惑をかけたに決まってるだろ？」

15〜16歳ぐらいのデューマンの少年が言う。

「あ、あの〜、あなたたちは？」　とエミリアが2人に訪ねる。

？「ああ、。申し訳ありません。紹介が遅れました。僕の名前は、デイオン。デイオン・バーデン」

？2「俺は、ソロ。ソロ・レスター」

つと青年と少年が自己紹介をする。

「俺の名前は……」

つとルークが自己紹介しようとしたが、

「君たちのことなら、よく知ってるよ。ルークさんとエミリアさんですよ？」

「「えっ?」「っと驚くルークとエミリア。」

「ど、どうして、あたし達の名前を?」

「何故って、お前達よく雑誌などに載ってじゃあねえかよ」

「雑誌に載ってるだけで、実際パツと見ただけで、分かるものか?」  
「っと聞くルーク。」

「……、分かったよ、正直に言うよ。」「っとディオンが言う。

「いいのか?兄貴?」

「言わないと、疑われるからね。だが、その前にミケのことで謝らないと」っとディオン。

「まったく、アイツのせいで、仕事もやりにくくなるだらけだ。」  
「っソロが右手を頭に当て、ため息をつく。」

「ミケ、こっちにこい」っとソロが叫ぶ。

「……。」ムスツとするミケ。しかし、

「僕の頼みでも……かい?」っとディオンがいう。

「ッ!!!」（顔は笑っているが、なんだ、この威圧感は）「っとルークは感じた。」



ミケはしぶしぶ頷き、ゆっくりディオンの近づく。

「瞬間移動みたいな特殊能力が使えるんだから、使えばいいじゃん」  
と言ったエミリアだったが、

「力が残ってないから、使えない」っと苛立ちながら言う。

「ミケ！―さっさとこの2人に謝れ」っとミケ言うソロ。

「・・・ごめん」っとミケが心がこもってない謝り方をする。

すると、

ドカツ！！

ディオンのミケを叩きつけ、ミケの頭を押しながら、

「ちゃんと謝りな？ミケ。」っとディオンの言う。

「痛い痛い、ディオン兄さん、痛いよ。」っと痛がるミケ。

「謝りなさいっと、言ってるんだよ。」っさらに押し付けるディオ  
ン。

「うわゝゝゝ、痛そう。」っとエミリアが言った。

「わ、分かった。ご、ごめんなさい！！」っとミケがもう一度謝る。

「いいよ、よく出来たね。」っと言いながら、ディオンの押し付けた手を離す。

「だいたい、人を襲撃しといて、謝るだけでいいのか？」っと疑問がるソロ。

「そうだね、どうしたらいいかな？」っとディオソ。

「えっ……、僕、謝った意味くない？」っとミケ。

「……もう一度、謝るかい？」っと笑顔でミケに睨む。

「いやいや、もういいよ」

「はあ……、どうする？ルーク？」っとエミリアがルークに言う。

「まあ、俺たちも戦って、ミケに傷付けたしな。」  
っとルークが答える。

「そうだ、君たちも謝……、痛ッ！！」またディオソに頭を叩きつけられる。

「もう一度、謝りなさい」っとディオソがミケの頭をさっきより強く押しながら言う。

「ごめんなさい……！」  
っとミケ。

「はあゝゝ、」また右手を頭に当て、ため息をつくソロ。

「1ついいか？」っとルークがディオンの質問をする。

「はい、何でしょうか？」っと威圧感のない笑顔で答えるディオン。

「お前たちは・・・」っと質問をしようとしたが、突然、

ピピピッピピッ、

っとエミリアの通信がなった。

「誰からだ？」っとエミリアに言うルーク。

「ええっと、お父さんからだ」っと通信に出る。

『おい、エミリア、ルーク。依頼に会った不審人物の5人がガーディアンズに捕まった。どうやらガーディアンズが巡回中に見つけたらしい。不審な5人なんだが、元ローグス3人と強盗2人だったらしい。どうやら5人で銀行を襲う計画をしていたらしい。やつらの持ち物からそれらに使う道具もあった。』

『っていう事だから、帰って来てもいいぞ。』

『と通信を切るクラウチ。』

「っていつか、依頼を受けてたの忘れてたな。」っと右手を頭に当てるルーク。

「いろいろあったもんね。さすがにもう疲れたよ」っとエミリアが答える。

「そうだな、久しぶり凄い戦いをしたしな」っとルークも言う。

「そういえば、質問があるって言ってたね？」っとディオンのルークに言うが。

「兄貴、俺が見る限り彼らは疲れてるし、長話もあれだ。日を改めないか？それにミケの説教しないと」っとソロが言う。

「えっ……また……説教？勘弁してよ。」っと叫ぶミケ。

「うーん、僕はその意見に賛成だけど……、君たちは？」

「そうだな、とりあえず今日は帰ろうか？エミリア？」

「いいの？ルーク？まだ会って時間も経ってないのに信じていいの？」っと言うエミリア。

「とりあえず、日を改めて話すことにするよ」っと答えるルーク。

「じゃ、この店で話すから……。」っとルークに店の名前が書いていたパンフレットを渡す。そして、クイツと首でパンフレットにやる。

「……分かった、じゃこの店で、」っと何かに気がついたルークは、パンフレットをしまいながら、言うルーク。

「じゃ、3日後に」っとディオンの言う。そして、ディオンの

「さてと、ミケ、ソロ行こうか。」っといい何やらボタンをいじっ

てる。数秒後船が真上に止まり、ゆっくり降りてきた。

「じゃ、3日後に」っとディオンの右手をあげながら船に乗り、その後にはソロ、ミケが続く。ミケは少しまだ、フラフラしている。そしてミケが振り返り、頭を下げる。

ドアが閉まり、ディオンの乗った船は立ち去って行った。

「エミリア、俺たちも帰るか。」っとエミリアにいい、

「そうだね、帰ろうか。」っとエミリアが船を呼ぶ。ディオンの船とは違い、ふねが着くのは遅い。数分後、船が到着し、ゆっくり船が降りてくる。

「さあ、帰ろうか?」っとエミリアが言う。

「そうだな」っと船に乗ろうとしたが、

「???」っと不意にルークが振り返る。

「……」辺りを警戒してるのか、辺りを見渡している。

「何やってるの、置いていくよ。」

「気のせいかな?」っと警戒していたルークだが、エミリアが急かされたので、急いで船に乗る。

そして、エミリア達の乗った船が飛び立って行った。

「……ガッ!」

? 「危ねえ、危ねえ、アイツ警戒してたよ」

? 2 「あの人、なかなかの腕前だったね。凄い戦いだっただね。それもある子供も」

? 3 「ま、俺たちの相手じゃないだろう。まだあの腕じゃ」

? 5 「でも、あいつと戦いたい。っていうか今直ぐにでも」

? 「よせ、よせ、まだ俺たちの力を見せるのはあとだ。」

? 3 「そうだな」

? 4 「はあっはあっはあ、やっと見つけたッスよ。置いてくなんてひどいッスよ」

? 「わりいな、さてと、行くか」

? 2 「そうですね。私達の計画を達成するために」

第一話：依頼（終）

## 第一話：依頼4（後書き）

まず1つとして、エミリア達の船を呼ぶようにしたのは、ミケが船を壊してしまうので呼ぶようにしました。

正直に言うと、どうやってパルムに？や船はどうしたの？と書いて思ったのでそのような形になりました。

## 1 1 依頼報告（前書き）

第二話では、ごいません。第二話が始まる前ですので、1 1に  
しました。

最初の1 は、第一話、みたいな、ものです。

では、どうぞ。



## 1 1 依頼報告

リトルウィング

リトルウィングにしたルークとエミリア。そうしてエミリアがルークに言う。

「あんた、本当に怪我、大丈夫なの？」とエミリアがルークの怪我の心配をする。

「ああ、何とかな。」と答える、ルークだが……

「そんなこと言うけどさ、あの時の傷が大きくなったら……」  
つと言う。

そう、ルークは一度、怪我をしたのである。だがルークは、

「大袈裟だよ。単なる、かすり傷だろ？」とルークは、言うが。

「あれが、かすり傷って言えたもんね。鍼を縫うほどの、怪我だったのに」

「怪我を心配してくれるのは、嬉しいが、クラウドに依頼の報告しないと。まあ、不審人物の5人はガーディアンズ達が捕まえたがな」  
つと言うルークにたいして。

「あの3人の事、話すの？」つと言うエミリア。

だが、ルークは、

「いや、まだ言わない方がいい。彼らを知らなさすぎるからな。」  
　　とルークが答える。

「でも、その怪我を見て、何か会ったって、聞かれたらどうするの？」  
　　とエミリアがルークに聞く。

そしてルークは、

「よそを見たら、崖から落ちたとしても、言えればいいだろ。」  
　　とルーク言う。

「……絶対信用しないと思う。」  
　　とエミリアが呆れながら言う。

「まあ、その時に、言い訳を考えよう。とりあえず、事務所に行こう。」  
　　とルークがエミリアに言う。

「（スッゴい、心配なんですけど）」  
　　と、口では言わず、心の中で思いながらルークに付いていくエミリア。

（リトルウィング事務所）  
　　プシュ、

　　とドアが開き、事務所の中に入る、ルークとエミリア。奥には、  
　　クラウチがいた。

「クラウチ。今帰ったぞ」  
　　とルーク。

「おう、帰ったか……。ってか、おめえ、どうしたんだよ？その怪我は？」っと聞いているクラウチ。

「これか？油断していたら、原生生物に攻撃された。」っとルークが答える。

「……、そうか。エミリアは怪我はないのか？」っとエミリアも聞く。

「あたしは特に痛いところは、ないよ」っとエミリアが答える。

「んで、何のようだ？」っとクラウチがまた質問する。

「依頼の方は、ガーディアンズが片付けたが、一応、依頼報告をしようと思ったんだよ」っとルークが答える。

そして、更にルークは言う。

「もう少し、あの辺を搜索した方がいいかもしれない」っとルークが答えた。

「えっ？」っとエミリア。

「なにっ？」っとクラウチ。

「どういう意味だ？」っとクラウチが質問する。

「……、単なる勘だ」っとルークが答えた。

「「????」「」っとクラウチとエミリアが頭の上に、?マークが浮かぶ。

「・・・それより、ルーク。今日、おめえ、休みだったな?今日はもういいから、部屋で休め。今日の休日は明日にするからよ。」っと行ったクラウチだが。

「なあ、クラウチ?その休日、3日後にしてくれないか?」っとルークが言う。

「んっ?何でだ?」っとクラウチが聞く。

「その日、少し行きたい場所があるんだ。もしかしたら、1日になるかもしれない」っとルークが答えた。

「????、まあ、おめえさん、が3日後にしたいなら別にいいけどよ」っとクラウチは許可をした。

「(やつぱり、行くだ・・・)」っとエミリアが心配そうに、心の中で呟いた。

「じゃ、クラウチ。俺はこれで、失礼するよ」っとルークは、右手を上げ、事務所を出た。

ルークが部屋を出たのを確認すると、

「んでだ、アイツ、何で怪我をしたんだ?」っとエミリアに聞くクラウチ。

「えっ？あ、あいつ、いつ、言ってたじゃん。げ、原生生物に攻撃されたって」っと焦りながら言うエミリア。

更にクラウチは、

「あんな嘘、ガキでも言えらあ。嘘を聞かされて、素直に、はい、そうですね？って言うわけねえだろ？だいたい、急に襲われたからと言って、あんな怪我はしないだろ？アイツならなあおさら。」っとクラウチが言う。

「うううっ、」っと更に焦り、言葉を失うエミリア。

「・・・、お前のその焦り様から見て、やはり、原生生物に攻撃されたのは嘘だな？」っとエミリアに聞く。

もう、観念したのか、エミリアは

「うん、」

っとエミリアは頷いた。

クラウチは右手を頭に当て、ため息をつく。

「詳しいこと・・・、話せるか？」っとクラウチはエミリアに聞く。エミリアは、コクリっと頷き、依頼中に、あったことを話した。

「なるほど、」んで、3日後に会おう、ってことで、休日を3日後に

したんだな？」っと難しい顔する。

「うん・・・」っと、エミリアは、頷いた。どこか、元気がない返事だった。

「まあ、さらに詳しい内容は、アイツから聞くとして、エミリアは今日はもう、休んでいいぞ。」っとクラウドが言う。

「うん、わかった」っとエミリアは答え、エミリアも事務所を出た。事務所出てすぐに、

「クラウドに、話したんだな？」っと不意に右から声がした。

「うええっ？」っとエミリアが驚く。

声がした方を見ると、ルークが立っていた。なにやら怒った顔している。

「クラウドに、話したんだな？って聞いてるんだ！！」っとさっきより大きな声で言う。

「あ、あたしだって、言いたくなかったわよ！！。でも、お父さんに聞かれて、仕方がなく。そもそも、あんたの嘘が、下手だから、こっとなったんじゃないの！！？」っとエミリアも怒鳴る。

「だから何か？それで話してしまうのかよ！！」っとルークが言う。  
ガヤガガヤ

つと回りが騒がしくなる。

すると、事務所からクラウチ、ウルスラ、チエルシーが出てきた。

「おい、ルーク！おめえ、いい加減にしろよ！！」つとクラウチが怒鳴る。

「エミリアの言う通り、正直に話さない、おめえが悪いんじゃないのか？」つとクラウチがルークに言う。

「正直に話さない？それだけ、俺が悪いのか？話せない事を聞くあんたも悪いじゃないのか？」つとルークがクラウチ言う。

「てめえつ」つとクラウチ言うが、

「ルーク！あんだ、本当にいい加減しなさいよ！！」つとまたエミリアがルークに怒鳴る。

「はぁ・・・、わかったよ・・・」

つとルークは、そのまま部屋には行かず、マイシップに入って行った。

「てめえ、まだ話しは」つとクラウチが言うが、ルークは無視して、マイシップに乗る。

そして、そのままどこかに行ってしまった。

「エミリアっ？アイツに酷いこと・・・」言われたのか？って言

おうとしたクラウドだが、

「……………」エミリアは涙を流してた。

「エミリア！！」っと心配したクラウド。

「どうしたんだよ？本当にアイツに酷いこと言われたのか？」っとクラウドが焦って、エミリアに聞く。

「……………」エミリアは答えない。いや、答える事が出来ない。エミリアは後悔していた。無駄だと分かっていたながら、クラウドに嘘を言ったルーク。それなのに、嘘が下手だからつと言い、ルークのせいにした。いや、気にしてるのはそこではない。今までルークとあれほどまで、口喧嘩をした事がない。そして、マイシップに乗るルーク。そう、それはまるで、家を飛び出した自分と似ている出はないか。それをエミリアは気にしていた。何しろ、ルークは戦いで怪我をしている。前の傷も完全に治ってもいないにも、かわらず。エミリアはそれを気にしていた。

「仕方ねえ、ルークの方は俺が追う。エミリアはこのまま休め。いいな？」っとクラウドが言うが、

「お父さん、あたしも行く」っと言つエミリア。

「なに？」っとクラウドが聞き返す。

「嫌な予感がするの……………」っとエミリア

「嫌な予感だと？ちっ、仕方ねえ。ウルスラ、チェルシー、ちよっくら、行ってくる。留守は任せたぜ。」っとウルスラとチェルシーに声を掛ける。



「わかったわ。」っとウルスラ。

「ちゃんト、つれテ、帰って来てヨ」っとチエルシー。

そしてエミリアとクラウチはマイシップに乗り込んだ。

## 1 1 依頼報告（後書き）

登場人物の紹介は、次の話が終了したら、書こうと思います。

ルーク

ディオーン

ソロ

ミケ

???（次の話に登場）

の五名です（ちなみに、この登場人物の紹介はオリキャラの紹介です  
ので、エミリア達など紹介はしません。）

誤字、脱字がありましたら、教えてください。

ルーク「次話もよろしく」

## 1 2 悲しい決断（前書き）

うん、少しずつですが、書くのが慣れました。しかし、もっと頑張ります。

では、

1 2 悲しい決断をご覧ください。

## 1 2 悲しい決断

くパルム大都市・ショッピング街く

たくさんの人で賑わう、パルム大都市のショッピング街。その中に人の青年が歩いていていた。

「はあ〜」

つとため息をつく青年。そう、ため息をついた青年はルークである。

「俺、何であんな事を言っただろ」

つとリトルウィングで自分が言っただ事を後悔していたのであった。

「あんな事を言っで、更に逃げたんだ、帰りにくい」

つとなど独り言を言っでると、後ろから、

「何をブツブツ言っでるの？」つと声がした。

振り返っでみると、そこには、1人の女性だった。

「・・・、なんだ、お前か。」つとルークは女性に言っだ。

「なんだ、つとは何なの？久しぶりに再会したのに、最初の言葉はそれ？」つと女性は腕組みをしながら言っだ。

「ほんの二年前に会っただろ？」つとルーク。

「違うわよ、三年前よ。お父さんやお母さんの誕生日やお盆（お盆がある設定）に帰って来ないのは、”お兄ちゃん”だけだよ。」つと女性が言う。

「なんと言えはわかる。俺を”お兄ちゃん”って呼ぶなって言ってるんだろ。ソラ。」

「お兄ちゃんだからお兄ちゃんって言って何が悪いの？」

「恥ずかしいんだよ！！」つと女性に怒る。

ルークの話していた、女性、ルークの妹のソラ・ミル・オルテガである。

そしてソラは、

「じゃあ、何て呼んでほしい？お兄ちゃん？兄さん？それとも、デイオ兄さん？」

「最後のはやめろ」つとルーク。

「……、いつまで、自分をかくすの？」つとソラ。

「……」つと黙るルーク。

「今まで”デイオ”として生きてきたのに、なぜ偽名を？」つとソラ聞く。

「やっぱり、兄さん。リトルウィングを辞めるつもりなの？」つ

とソラが聞く。

「ああ、そうだ。いや、そのつもりだったんだが……。」

っとまた黙ってしまうルーク。

「辞めるに辞められなくなってしまった。」っと続きを言うソラ。

「ああ、そうだよ。今、思うとなぜ偽名を使っただか……。」  
っと後悔するルーク。

「じゃあ、どうするの?」っとソラが聞く。

「この先もルークとして生きるか、それとも、ルークを捨てて、デ  
イオとして生きるか」っとソラが言う。

「……」下を向くルーク。

「お兄ち……、兄さん。」

「……俺は、」っと答えを言おうとしたルークだが、

「あつ、いたいた。ちょっとお姉ちゃん。置いていかないでよ。」  
っと後ろから男の子がやって来た。そして、

「もう、酷いよ……って、うわっ、デイオお兄ちゃん。」っと  
驚く男の子。

「よお、リオル。久しぶり」っと男の子に言う。

「ほんと久しぶりだよ。雑誌などでお兄ちゃんの活躍を見たよ。すごいねえ、亜空間事件を解決するなんて、しかも英雄だよ」っと笑顔で言うリオル。

この男の子の名前は、リオル。リオル・ルタ・オルテガ。ルークの弟である。

そしてリオルは、

「あつ、しまった。今はディオじゃないもんね。ルークだった。」  
っとリオルが言う。

「いや、ディオいい。」っとルーク。

「お兄ちゃん？」っとソラが言う。

「今日、限りで、ルークを捨てる。そして今日からディオで生きていく」っとルーク。

「いいの？お兄ちゃん」っとソラ。

「ああ、もう決めた。……それに……もう、あそこ（リトルウィング）には、帰れないしな。」っとルークが言う。

「じゃあ、退社するの？」っと聞くソラ。

しかし、ルークは、

「いや、ルークは……死んだ事にする。」っとルークが信じられない事を言った。

「「えっ？」」っとソラとリオル。

「退社をすれば、あいつ（エミリア）が探すかも知れないし」っと言うルークだが。

「それだけは、絶対にダメ」っとソラ。

「お兄ちゃんが一番分かるでしょう？もしもルークが死んだ事にしたら、一番悲しむのは、エミリアさんよ」っとソラが少し怒りがこもった言い方をする。

「……」何も言えなくなる、ルーク。

「例え、ルークが死んだとしても、エミリアさんは信じないわ。必ず探すわよ。死んだのは嘘だと自分に言い聞かせて」っとソラが続ける。

だが、ルークは……

「あいつを使えば……エミリアも諦める。」

「まさかっ！！」っとソラが声をあげる。

「そう、あいつを使う」っともう一度言うルーク。

「そんな事したら、カイン兄さんが……それに、何よりお父さん達が許さない。」っとソラが怒る。

「カインが言っていた、俺は兄貴の血で救われた。もし、俺が助からなかったら、俺の体を利用しても構わない、っと。何せあいつは俺の血で生きて、そして死んだ。」っと元氣なく言うルーク。



「カイン兄さんの奇病の件ね」っとソラが元氣なく言う。

「僕も、カイン兄さんの体の事について聞いた。承認として……。確かに言ってた。俺が死んだら体を利用してもいいって」うつ向きながら言うリオル。

「でも、お父さん達が……。」と言ったソラだが。

「……。もう、決めた事だ。父さんも母さんも関係ない……。」  
っとルークは元氣なく言う。

「……。エミリアさんは……。どうするの？」っとソラが聞く。

「あいつは、もう一人前だ、俺がいなくてもやっていける」っと答えるルーク。

「……」これ以上なにも聞かないソラだった。

「まずは、髪型を変えないと。」っと何処かに行こうとするルークに対してソラが言う。

「本当に……。良いのね」っとソラが言う。

そしてルークが立ち止まりそして、こう言う。

「ルーク・フィレンは、今日で終わり。俺は、ディオ・ルタ・オルテガだ。それと……。お兄ちゃんって呼ぶな。」と言って歩き出したディオ。いつも通りに言っただけだったが、ソラには分かってた。顔はいつもの同じだったが、心はとても悲しんでいた。

ソラとリオルから少し離れた所で立ち止まり、ディオは涙を流した。  
そしてディオは呟いた。

「エミリア……みんな……すまない」っと。

そしてまた歩き出したディオだった。そしてディオは通信機とパンフレットを取り出した。パンフレットはディオンからもらったものであり、実はすみの方にディオンの番号が書いてあった。そしてディオは書いてある番号にかける。

『はい、ディオンです』

「どうも、ルークです」

『……ディオでいいですよ。』

「!!!?」

「なぜそれを？」

『ソラちゃんとリオル君に聞いてないんですか？』

「???」

『彼女らは、僕達の立ち上げた部隊に入ってるんです』

「なんだって!?!」

『驚くのも、無理がないと思います。どうでしょう。会つ日にちを

縮めましょうか？もちろんあなたの都合に合わせますよ。デイオさん。』

「明日……」

『???』

「明日の10時に、この店で」

『この店とは、そのパンフレットの店ですか?』

「ああ」

『残念ですが、その店、潰れてますよ。』

「なにっ!？」

『僕のお気に入りの店があるんですが、その店にしませんか?』

「わかった。なんという店の名前だ？」

『ラッピーカフェと言う店です。名前は、あれですが結構人気の店なんですよ』

「わかった。ラッピーカフェだな」

『はい、あつ、いい忘れました。ラッピーカフェはパルム大都市のカフェ街の中間辺りです。』

「わかった。」

『それでは、また明日』

「まってくれ。」

『はい？何でしょうか？』

「そこで詳しく話してもらうかな」

『貴方も、そのつもりで来てくださいね』

「ああ、わかった」

『それでは、失礼します』

電話が切れ、ディオは通信機とパンフレットをしまい、歩き出した。

## 次回

### 第二話：嘘と真実

## 1 2 悲しい決断（後書き）

次回、第二話：嘘と真実ですが、その前にオリキャラの登場人物の紹介です。

紹介のキャラは

ディオ（ルーク）

ソラ

リオル

ディオオン

ソロ

ミケ です。

謎の5人は名前が5人登場次第書きます。 ちよくちよく謎の5人が登場してきます。 本格的活動はまだしません。

## オリキャラ登場人物（前書き）

無駄な所を省いたことにより、ページが極端に少ないです。

ディオーン「少ないのは、貴方の発想力がないからでは？」

ソロ「兄貴の名前、ディオーン。そして、英雄の名前ディオ。かなり似てるし、発想力のなさが出てる」

ディオーンとディオは、全然違うよ。マカロンとまころんみたいな。

ミケ「M S P からとりました？」

そ、そんなことはない。

ディオーン「……（目が泳い出ますね）」

ソロ「短いが見てくれ」

あつ、俺のセリフ……。

## オリキャラ登場人物

ディオ・ルタ・オルテガ

種族：ヒューマン

年齢：22歳

タイプ：ブレイバー

一人称：俺

髪色：金髪

服装：

イロハフブキ白×黒

今作の主人公。旧名がルーク・フィレンで今まで、エミリア達に”ルーク”と呼ばれて、いたが。実はその名前は偽名であり、本名は、ディオ・ルタ・オルテガである。ある事件により、偽名のルークで、暮らしていたが、リトルウィングで偽名を使った事を後悔している。とある、ことでリトルウィングを飛び出したことも後悔している。

無理矢理、髪型を変えたり、服装も変えた。今後はディオとして、生きていく事を決める。

ソラ・ミル・オルテガ

種族：ヒューマン

年齢：19歳

タイプ：フォース

一人称：私

髪色：金髪

服装：カグヤヒラリ

ディオの妹。

頬つぺたの上に赤い模様？みたいなものをつけている。元カーディアンズで、兄ディオが失踪したため、わずが3ヶ月で辞める事になった。再会後は、ディオには言っていないが、ディオンの立ち上げた部隊に入っている。

リオル・ルタ・オルテガ

種族：ニューマン

タイプ：ハンター

一人称：僕

髪色：茶髪

年齢：18歳

服装：

パニッシュジャケット

母親の血が多く繋がり、ヒューマンである兄、姉とは違い、ニューマンとして生まれた。強くなりたかったので、ソラに無理を言っただいオンが立ち上げた部隊に入った。

ディオンのバーデン

種族：ヒューマン



タイプ：????

一人称：僕

年齢：18～19歳?

髪色：銀髪

イルミナス・コート

ルーク（ディオ）とエミリアが依頼中にあつた青年。常時は笑顔み  
たいな優しい顔だが、笑顔で、凄い威圧感を出すことも出来る。自  
分の立ち上げた部隊のリーダー。ディオンにも、偽名の名前がある  
とかないとか。ある人物を追つてる。

ソロ・レスター

種族：デューマン

タイプ：ハンター

一人称：俺

年齢：15～16歳

髪色：黒髪

服装：

ブレイブスコートシリーズ（黒×暗い青）

ディオオンが立ち上げた部隊の副リーダー。ディオの前で、自分の強  
さを見せてないので、ディオはソロの強さを知らないが、相当のや  
り手。ミケに対してかなり厳しい。

ミケ・ラン・ジャータン

種族：ヒューマン

タイプ：ブレイバー

一人称：僕

年齢：10歳

髪色：青髪

服装：

ジャツジメントコート

デリオ（ルーク）とエミリアを襲った張本人。ヒューマンでナノブラストを使える。油断したせいか、デリオ達にやられる。そのあと、無理矢理デリオンに誤らさせられた。何故、デリオ達を襲ったのか、まだデリオに言っていない。

## オリキャラ登場人物（後書き）

ソロ「なあ、兄貴？これだけで、俺達の事をわかってもらえるか？」

ディオソ「まあ、自分達がこのような人物だと、今後の話で、わかってもらえれば、いいと思いますよ。」

ソロ「じゃ、書く必要なかったんじゃない？・・・」

ディオソ「あるのとないのでは、違いますからね。」

ソロ「確かにな。んっ？作者がいないな？」

ディオソ「彼なら、ディオ君に呼ばれて、出掛けましたよ。」

ソロ「おいおい、・・・締めはどうする？」

ミケ「僕がやるよ。誤字、脱字がありましたら、お願いします。」

## 第二話：嘘と真実1（前書き）

第二話です。ほとんどが会話になってますが、気にしないでください。

ディオ「確か……この辺のはず……あ、あっちな」

では、どうぞ

## 第二話：嘘と真実1

くパルム大都市・カフェ街く

カフェ街に、ディオがいた。ディオと話をする日になったのだが、ディオは、キヨロキヨロしている。

「確か……、この辺のハズなんだが……」

どうやら、ラッピーカフェを探しているらしい。つとそこへ、

「もう少し行った先の黄色い店ですよ」つと後ろから声がした。振り返ってみると、ディオがいた。どうやら声の主はディオだったようだ。

「あつ、ああ、そうか」つとディオは、答えた。

「ん？あんた1人か？」つとディオがディオに聞く。

「ええ、ソロとミケは、ある調査をしてもらってます。」

「????。ある調査？」

「詳しい話は、店で話します。さて、行きましょう」つとディオは、約束の店である、ラッピーカフェに向かっていった。ディオは

その後を付いていく。

くラッピーカフェく

ガチャ、

『いらつしゃいませ！！何名様ですか？』つと定員が答える。

「二名です。」つとディオオンが答える。

『では、こちらのお席になります』つと定員がディオ達を席に案内する。

ガヤガヤ、ガヤガヤ

水とおしぼりを持ってきた定員が、

『ご注文が決まりましたらお呼びください』つと定員がディオ達の席を離れる。

ガヤガヤ、ガヤガヤ

「なかなかの店だな。」つと感想を言うディオ。

「それだけではないよ。味もいいんだ」つと答えるディオオン。

ガヤガヤ、ガヤガヤ

「……にしては、少し騒がしいな。」

「あれが、原因だと思うよ」つとディオオンが指を指す。その先にはモニターがあつた。モニターには、グラールチャンネル5がやってきた。どうやらニュースの内容で、ガヤガヤしていたらしい。

『リトルウィングのルーク・フィレン、失踪。今現在、リトルウィングのメンバーがルークの搜索するも、ルークの居場所、確認出来ず。』つとニュースが流れていた。

「……」

「帰らなくて、いいのかい？」

（少し、会話だけになります）

「ああ、」

「偽装死亡……止めたそうだね。ソラちゃんに聞いたよ」

「ああ、やっぱり、悲しむ人を見たくない」

「あれほど、ルークは死んだ事にするつと云つてたのに、なんで？」

「……夢を……見たんだ……」

「夢？」

「エミリアの夢だ・・・、俺が偽装死亡したことにより、エミリアが凄い落ち込むんだ。いや、それだけじゃない。俺は、偽装死亡したことにより、エミリアの笑顔を奪ったんだ。それで、エミリアはもう、笑うことはなかった」

「だから、偽装死亡は止めたのかい？」

「偽装死亡をするつと言った自分がバカみたいだ。（ミカに、エミリアを守って、つと言われたのにな）」

「まあ、いいんじゃないかな？そういうのは、夢に限るよ。」

「ああ、そうだな。」

「それより、何か頼も。何飲む？」

「そうだな、カフェオレにしよう」

「じゃあ、僕はホットコーヒーにしよう」

定員を呼んだディオンは、それぞれ注文するやつを頼み来るまで、例の話をする。

「ディオオン、早速話なんだが」

「待って、」つとディオオンが話を止める。

「どうした？」



「ディオソじゃ、君と被るから……そうだな……ルークにしてくれる?」

「ふざけるな」

「ごめん、ごめん。冗談だよ。ディックつとよんでくれるかい?」

「ディック?」

「僕のもう1つのなまえだよ。ディック・ハリンソン。僕の偽名の名がこれだよ。」

「なぜ、偽名で呼ぶんだよ……」

「だから言ったでしょう?被るからだよ。」

そう、話をしていると、注文した物を持ってきた定員に注文した物を渡され、席から離れる定員。

「つで、まず聞きたいのはあるかい?」つと言っディック。

「あんた達の目的はなんだが」

「目的……か」つとコーヒーを飲みディック。

（会話だけになります）

「実は、僕達は妙な動きをしている5人をおってるんだ」

「妙な5人?」

「君たちが、依頼を受けたのはなんだったかな？」

「怪しい5人の調査。だが、それは元ローグス3人、強盗2人で、それと関係ないぞ？」

「いや、関係あると思うよ。」

「!？」

「依頼を受けた、怪しい5人がその5人じゃなかったとしたら・・・？」

「!!!!」

「そう、その依頼は、まだ終わってない」

「ま、まさか」

「しかも、その5人が、僕達の追っている5人の可能性もあると思うんだ。」

「（あの時の、妙な感覚はこれのことか？）」

「まあ、決まったわけじゃ無いけど、その可能性が大だね」

「そいつらの名前を知ってるか？」

「いや、今それを調査をしている所なんだ。ってな、訳で、それ以

外なら、話せるよ。」

「なぜ、その5人を追ってるんだ？」

「……、このグーラールを救うため」

「なにっ？」

「彼らは、このグーラールを支配する可能性のあるだ。」

「なぜ、わかるんだ？調査中なんだろう？」

「彼らに、嫌なオーラを感じたんだ。」

「嫌なオーラを？」

「うん、」

「でも、それだけグーラールを支配する奴らって決めつけるなど」

「……確かにね。支配だけで終わればいいけどね」

「どういうことだ？」

「彼らを調査中つと言っても、全然わかってないって事ではないんだ。」

「じゃ、少しならわかるのか？」

「うん、彼らは一人一人それぞれ違う種族だと言つこと。彼らに嫌なオーラを感じた事ぐらいだね。」

「でも、それだけで、そいつらを悪者にするのは……」  
ピピピッピピピッ

「あつ、ごめんね」

つと、ディオに謝り、通信に出るディック。

「はい、ディックです」

『……ディックつて、なんで偽名使ってたよ兄貴。』

通信相手はソロだった

「ディオ君と似てるからね。だから偽名の方につかつたんだ。」

『オレとミケは分かるが、他の奴らならどうするんだ。ビックリするぞ』

「ごめん、ごめん、気を付けるよ。つで、わかつたのかい。」

『なあ、そこにディオの兄貴がいると……っっているみたいだな。なら丁度いい。ディオ兄貴も聞いてくれ』

「どうかしたのかい？」  
つとディックが聞く。

『あの5人。やはり、兄貴の言う通り、このグラールを支配をするつもりが高い。』

「やっぱり、そうだったんだね。」

（話の内容は、ディオとディックにしか、わからないように、通信の前にイヤホンを付けてます。）

「名前は、わかるか？」

「とディオがきく。」

『いや、あいつらなかなか仲間の名前を呼ばない。警戒しているのか、「君、お前、お主、」で読むで。』と答えるソロ。

「そうか。ありがとう」

「とディックが言うが……」

『それともうひとつ』と真剣な顔と言い方でいう（通信機は画面？が写る通信機でわかるかな？）。

「どうしたんだ？」とディオが聞く。

『さつき、奴らの目的は、グラールの支配って言ったが、どうやらそれはおまけらしい、』と言うソロ。

「何？じゃ、その5人の本当の目的はなんだ。」

『……兄貴には、5人それぞれ違う種族ってのは聞いたか？』

「ああ、聞いたが、それがど……」と言葉が失う。

「もしかして……」  
ディックがソロに聞く。

『ああ、間違いない……あいつら種族戦争を起こすつもりだ』

「なんだって」っと声を上げてしまふディオ。その声に、反応しデ  
イオに向く、客。

「すみません」っと謝り、小さい声で、ソロに聞く

「ま、間違いないのか？」

『ああ、あいつらそんな話をしていた。……聞き間違いであつ  
て欲しい。』っと悔しそうに答えるソロ。

『それに、あいつらの嫌なオーラの意味もわかった』

「なんだい？」っと聞くディック。

『あいつら……転生を使ってる』

「転生だって？」  
っとディックが聞く。

『ああ、間違いない。凄いオーラを感じる。……勝てないオー  
ラを……』

「……わかった……ありがとう。もう引き上げてもいいよ」

『わかった。これより帰還する』

少し間があく、すでに2人の飲み物は空だ。

「大変な事になったね」

「ああ」

「・・・・・・」

「・・・・・・」

「さてと、話の続けよ・・・・」と通信前の話をしようとしたが、

「あんた、いいのか！！種族戦争だぞ。そんな事が起きたら、世界がほろびるんだぞ」　　とディックに怒る。

ディックは

「わかってるよ」なぜか落ち着いてる。

「なぜ、そんな落ち着いていられるんだ。」　と聞くディオ。

「なぜって、あいつらにはまだ、種族戦争どころか、グラールの支配さえ出来ない。」　と答える。

「えっ？」

「考えてみなよ。今のグラール。みんな種族差別なく生活してるで

しょう。まず種族差別をするには、グラールを支配する必要がある。だけど、このグラールには、ガーディアンズ、同盟軍、ローグス、リトルウィング。SEEDを封印した英雄のイーサン・ウェーバー。．．．そして．．．亜空間事件を解決した英雄、ルーク・フィレンこと、ディオ・ルタ・オルテガ。君たちの力が統一すれば大丈夫だよ」っと答えるディック。

「凄い自信だな？」

「自信じゃない．．．答えさ。この世に強い絆を持てば、不可能を可能に出来る。君たちのその強い絆を力に変える。それが唯一、グラールを救う事であり、彼らに対抗出来る力。それが絆さ」

「．．．」っとディックの言葉に言葉が出ないディオ。

「一人で戦うなんて、バカな事を考えない事だね。」

「あいつら、転生してるんだろ？」

「転生してるから、絶対に強くなるとは限らない。転生して、強くなったと考えると必ず怪我をする。転生しても、かなり努力しないと、強くは慣れない。それに転生しても、必ず強くなる保証はない。逆に弱くなるかもしれない。．．．」っと悲しそうに言う。

「？」っと疑問そうにするディオ。

「昔いたんだよ、僕達の部隊に、転生して強くなったって言い張って死んだ仲間がね。全くバカなやつだよ。」

「．．．」



「グラールを救うためにはまず絆を掴まなければならない。今のグラールの絆よりも大きな絆が。彼らに支配されると、絆は簡単には崩される。そうなる前に……」

「そうだな。」

「ところで、エミリアちゃんから通信……来ないね。心配してるはずなのに」

「エミリア達の通信は拒否にしてるからな。」と答えるディオ。

「そっか、」

「……」

「……」

「まずは……、」

「??」

「あんたの話を聞くのが先だったな？」

「そうだね」っと店員を呼び。

「??」

「コーヒーのおかわりください」

「あっ、俺も」

『はい、かしこまりました』　つと店員がディオ達の席を外した。

「それじゃ、話そうか。僕達の絆を深めるために」

## 第二話：嘘と真実1（後書き）

ディオ「嘘と真実にあまり関係ないな」

なに、これからですよ。まだ1番目だから。

ディック「それは楽しみですね」

でしょう。君となら話が会つかも

ディオ「はあ」

ピピピピピピ

ディオ「?？」

通信？

ディック「僕だ」

ピッ

ソロ「誤字、脱字があつたら教えてくれ」

## 第二話：嘘と真実2（前書き）

もう、ほとんどが会話です。

ディック「コーヒーおかわり」

ディオ「俺も、」

ちなみに飲み放題です。セルフサービス出はなく、店員が運ぶ珍しい店です。

店員『それでは、嘘と真実2、御覧下さい。』

## 第二話：嘘と真実2

リトルウィング事務所

「どうだ、見つかったか？・・・わかった。調査を続けてくれ」

ピッ

「はぁ、あの馬鹿、何処に、行きやがった。」っとクラウチが腹をたてている。そこへ、

「クラウチ、ルークは見つかったの？」っとウルスラがクラウチに聞く。

「いや、ルークが乗ってた船なら見つかったんだが、肝心の居場所までは、まださうだ。」右手で自分の頭をかくクラウチ。

「チエルシーは、店に来る客に聞いてるそうなんだけど、今のところ手応えがないみたい」っとウルスラも答えた。

「ナギサの方も数分前に、通信があつたんだが、手応えがねえそうだ。」

「そう、何もなければいいけど」

「ところで、・・・エミリアの様子はどうか？」っとクラウチが

ウルスラに聞く。

「いつもと変わらないわ。」っとウルスラが答えた。

「そうか。ルークがいなくなって、駄目になるかと思ったがなあ。」

「『今度は、あたしがルークを助ける番』っと行って、探しに行つたわ」

「ホント、変わったよな。あいつ。」

「彼のおかげよね。あの子が変われたの」

「ああ、そうだな」

「……」

「んっ？どうした？」

「な、何でもないわ。」

「???」

……数日前

「ルーク、ちょっといいからしら。」

「えっ？あ、はい。なんですか？」

「エミリアの事なんだけど」

「エミリアがどうかしたんですか？」

「別にどうかした分けではないわ。」

「はい？」

「あの子が変われたのは、自分のおかげでだ、って考えたりする？」

「いえ、ただ俺は、エミリアの変わるところをサポートしただけで、別に俺が変えたわけでは、ないですよ。・・・なぜそんなことを？」

「前も、エミリアについて話した事、覚える？」

「同じような、話した気がしますね」

「そうね、じゃその後の話した事、覚える？」

「クラウチの家族の話？」

「その前よ」

「・・・、あなたが、ふとっ彼女の前から消えるんじゃないかって、話ですか？」

「その通りよ」

「・・・・・・」

「ルーク？」

「大丈夫ですよ。エミリアの前からいなくなったりしませんよ。」

「それを聞いて安心したわ。・・・・いつまでもエミリアを守ってあげてね。１人でのいるのは、寂しいと思うし、何よりあなたのパートナーでもあるからさ。」

「任せてください」

「頼もしいわ」

・・・・現在

「（あの時の話が現実になるとは、思わなかったわ。）」

「ウルスラ、大丈夫か？」

「えっ？ええ、大丈夫よ。それより、クラウチ、エミリアからの通信はあったの？」

「いや、まだだ。もう少しだと思う・・・・」

ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。



「「！！！」」

「も、もしもエミリアか？どうだっ……どうしたエミリア？何で泣いてるんだよ？何？ルークを見つけただど？それでなんで泣いてるんだ？………どういう意味だよ、それ……」

……数時間前

くラッピーカフェく

「なるほど、そういうことだったんだ」

「驚くのは、当たり前ですからね」

ディオとディックが雑談をしている。

「ところで、ミケの、『だよね〜』ってのは、なんだ？」とディックに聞く。

「ああ、それ？単なる癖だよ。」と答えるルーク

「癖？」

「たまに、やるんですよ。相手を馬鹿にした言い方。やめなさいって言っても聞かなくて」

「ミケのヒューマンのナノブラストは？」

「転生に失敗したんだ。」

「転生に失敗した？」

「僕達の転生機械はヒューマンはヒューマン、ニューマンはニューマンの専用の転生機械なんだ」

「つで、間違えて、ビーストで転生したわけだ。」

「そういうこと。まさか、成功するとは思わなかったよ。今後こんな事がないように壊したよ。あつ、もう結構時間だったね。もうこの辺にしようか？」

「2ついいか？」

「なんですか？」

「あんだ達の部隊の名前は？」つとディックの立ち上げ部隊に、ついて聞く。

「部隊の名前？そつういえば言つて無かつたね。僕達の立ち上げた部隊の名前は、【一種族】部隊つて言つんだ。」つと答える。

「えっ？い、一種族部隊？なんだよ、それ？」

「もともと僕達は、一種族だったのは、知ってる？ヒューマンによつて、ニューマン、キャスト、ビーストが造られ、そして各種族の関係が悪化し戦争が起きた。戦争は終わつても、しばらくの間は、種族差別は続いたと思う。デューマンという新たな種族も誕生した。

今は種族差別つと言ったものはないけど、もし、種族差別があつたとしたら、種族をなくし、皆が一種族になれば、種族差別もなくなると思うし、戦争も起こらないと思う。そういう意味合いもあつて一種族部隊にしたんだ。」っとディックが答えた。

「一種族か……」

「例え一種族になつても差別は続くと思う。僕達は差別つと言つたものを無くしていきたい。種族差別が起きた場合、グラールが滅び、戦争が始まる」

「……」

「そうなる前に、彼らを倒さなければ。」

「そうだな。」

「もう1つ聞きたいことはなんだい？」っとディックが言い、

「あんたも転生してるのか？」っとディオが聞く。

「うん、家の部隊で転生しているのは、僕と、ソロ、ミケの3人だよ」っとディックが答えた。

「わかった、」

「そろそろ、話も終わりにしよう。」

「そうだな。」

「何かあったら、連絡するしつ連絡先教えるから。」

「あんたからも連絡しろよ」

「わかってますよ。」

お互いに連絡先を交換する。

「じゃ、失礼します。お金の方は僕が払いますので」

「いいのか？」

「大丈夫ですよ。では、失礼します」つと会計をし、店を出たディック。そして、その後すぐに、ディオも店を出た。

くパルム大都市カフェ街く

ここに1人の少女と1人の少年が歩いていた。何やらぶつぶつ言いながら、歩いている。

「ルーク……どこに行ったの……」

あまり元気のない言葉だった。

「エミリア。大丈夫か？」

つと少年が少女に声をかけた

「えっ？あ、うん、ごめんね、ユート。大丈夫だよ」

エミリアとユート、どうやら少女と少年はこの2人のようだ。

「エミリア、ルークがいなくなつて、元気がないぞ。」っとユートが言う。

「だって、ルークがいなくなつたの……」

「エミリアのせいじゃないぞー！」っとユートが言う。

「えっ？」

「クラウドだって、お前のせいじゃないって言ってるし、ルークだってそんなことを言うはずない」っとユートが言ったのだが

「何で、あんたがルークの思ってることがわかるのよ。」

「匂いでわかる。あいつには、そんなことを言わない匂いが。」

「そんなんでわかるわけないでしょうー！」っと怒鳴るエミリア。

「今、気にしてるのは、あたしが、お父さんに嘘を言つとけば、こんな事にはならなかった。それに……あんぐらいで怒って飛び出したルークに怒ってやるんだ。」っとエミリアは言った。

「エミリア、お前なんだかルークみたいだぞ？」

「えっ？」

「エミリアがいなくなった時のルークに少し似てる。」

「でも、ルークみたいに強くなれない。」

「エミリアもずいぶん強いぞ。」

「うっん、あたしは強くないよ、お父さん達が心配しない様に、強くみせてるだけ……」と話していたエミリアだが

「この匂い……」

「えっ？」

「この匂い……ルークの匂いだ」っと走り出すユート。

「えっ？ ちょ、ちょっと待ってよユート。」ユートを追いかける、エミリア。

「あそこだ。あそこにいるぞ」っとユート

「はあ、はあ、ルークー！」っとエミリアが呼ぶ。

……しかし

「……」ルークと呼ばれた青年は無視して歩く。ルークと呼ばれた青年……そう、エミリアのパートナー、ディオ（ルーク）だった。

「ちょ、ちよっと、ルーク！」「っと言ったエミリアだが

また、無視して歩くディオ（ルーク）

「お前！！」っとユートが走ってディオの腕を掴む。

そして、

「お前ら……だれた？」っと言ったディオ（ルーク）に驚く2人

「誰って、何言ってるの？ルーク。」っと言ったエミリアは、泣き  
そうな声で言う。

「ルーク？悪いが人違いだ。俺の名前はルークじゃない」っと言  
いユートの手を自分の腕から優しく離させる。

「あんた、何言ってるの！！もしかして、まだ怒ってるの！！？」  
エミリアの目から涙がてできた。

しかし、ディオは

「あんたもしつこい人だな、俺はルークじゃないっていつてんだろ  
！！」っと怒鳴るディオ（ルーク）。

「ルーク……」

「まったく、」っと言い歩き出すディオ。そして惑星移動の大型船  
（電車みたいな乗り物）に乗るディオ。

「ルーク！！」っとエミリアが走り、今度はエミリアがディオの腕  
を掴む。

「いい加減にしろ!!」っとおもいつきエミリアの手を離す。

「!!!」っと驚くエミリアを無視して船に乗るディオ。そして船は飛び立っていった。

「ルーク……」っと膝を地面に付け、顔を手でおさえ、泣くエミリア。

「エミリア……」ユートはエミリアに言葉をかけようとしたが、やめた。こういう時、なんと声をかけたらよいのかわからなかった。

つとその時、

エミリアがクラウドに通信をした。

「もしもし、お父さん。」

『も、もしもしエミリアか?どうだっ……どうしたエミリア?何で泣いてるんだよ?』

「実は、ルークを見つけたの。」

『何?ルークを見つけただと?それでなんで泣いてるんだ?』

「もう、ルークは……ルークじゃない。あたしの知ってるルークは……もう、何処にもいない!!」

『………どういう意味だよ、それ………』



~~~~~

『・・・わかった、お前ら、とりあえず、戻ってこい。』

「わかった」

「大丈夫か？エミリア」　　つとユートがエミリアに聞く。

「うん、大丈夫。とりあえず帰ろ。」　　つとエミリアとユートは船に向かつて行った。

その光景を見ていたディックが。

「本当に、よかったんですか？ディオ君」　　つと呟いた。

## 第二話：嘘と真実2（後書き）

まだまだ嘘と真実は……

ユート「お前がエミリアを泣かしたな!!」

な、泣かしたのはルーク（ディオ）で

ユート「ルークがエミリアを泣かすわけがない」

ちよ、ちよつと、待てユート話を……ぎゃゝゝ  
エミリア「……」

ディック「誤字、脱字がありましたら、教えて下さい（ぼそぼそ）」

## 第二話・嘘と真実3（前書き）

もう、ほとんどが、会話になっています。

## 第二話：嘘と真実3

「モトブウ・カジノシティ」

「……」

わいわい、

「……」

がやがや

「どうやら、船を間違えたな。」  
「とディオは右手を顔に当てた。」

「ま、せっかく、カジノに来たし、少しだけやろうかな？」と考  
えていると。

「ルーク……さん？」と声がした。

不意に、偽名の名前を呼ばれたので、ディオは振り返ってしまった。

あつ、つと思つたが、すでに遅かった。

「やっぱり、ルークさん!! どうして、こんな所に? リトルウィングからいなくなったって、エミリアから搜索の手伝いをしての通信がありましたよ!!」声をかけた人物。それは、ガーディアンズのルミアだった。

「お、俺はルークって名前じゃない。」つと行つてみたが……。

「では、何で振り返つたんですか?」

「う、後ろから、声をかけられたら、普通振り向くだろ?」つと云つてみたが、

「知らない方の名前だったら、普通、振り返りませんよ。」つと言い返えされた。

「……」何も言えなくなつてしまった。

「ルークさん?」つとルミアが言う。

「仕方がない……久しぶりだな。ルミア。元気だつ……」  
だったか、つと言おうとしたディオだったが。

「ルークさん！！それよりも何で、リトルウィングを飛び出し、失踪をなんてしたんですか？それよりも、何で、ここに？」

「君こそ、何で、ここに？君が来るような場所じゃないぞ」

「ルークさんも同じですよ。ルークさんもこのような場所に来るような所じゃありません」

「話せば長くなる。・・・すべて話せないが、話せる所まで話させてくれ。」と言うディオ。

「わかりました」っとルミアは答えた。

「立ち話もあれだし、あの店で話すよ。」っとその店に歩いていくディオ。そのあとをルミアがついていく。

く喫茶店

数分後

「そういう事だったんですか。」っとルミアが言った。

言った内容は、自分の名前についてだけ。まだ怪しい5人の話をし

ない。まだ正しいと決まった分けではないし、かえって混乱するの  
で、自分の名前だけ話した。

「じゃ、これからディオさんって呼べばいいんですね」

「ああ、頼む。あと、エミリア達やガーディアンズの他の連中には  
秘密にしてくれないか？」

「わかりました。その代わり・・・」とルミア。

「その代わり？」と聞くディオ。

「何か奢って下さい。」

とルミアが言う。

「奢るだけで、いいのか？」と笑いながらディオが言う。

「はい、もちろん高いのを食べますよ。」と答えたルミア。

「秘密にしてくれるなら、それぐらい構わない。」と言うルーク。

「モトブウ、カジノシテイ」

「ところでルミア？」ディオがルミアに質問する。

「なんですか？」

「さっきも言っただけど、何で、君がここに？」どうやら、会ったときの話のようだ。

「ああ、それですか？実は他の任務で来てたんです。」

「他の任務？」

「カジノで悪質な手を使い、メセタを儲けてる犯人を捕まえに来たんです。犯人を捕まえた後に、あなたにあったんです」

「そうだったんだ。」

「ルー……ディオさんは何で、ここに？」ルークって言いかけた、ルミア。

「……船を間違えた」

「えっ？船を？」

「ああ、」

「ふっふっふ、」っとルミアが笑う。

「な、何がおかしい？」

ディオも笑いながら聞く



「あなたもそんなミスをするんだなって」

「俺も、1人の人間だよ。失敗したりする」

「……リトルウィングを抜け出したのは」っと少し小さめな声で聞くルミア。

「……さあ、俺も、わからない。」

「……」

「……」

「ディオさん……」

「何だ？」

「いなくならないで下さい（小声）」

「えっ？」

「何でもありません。それでは、失礼します」

「ああ、」

つとルミアは走って立ち去っていった。先に行かせたガーディアンズを待たせているのだろう。

「さあ、俺も、行くか。」っとディオもこの場を離れた。

「??????」

?「……………」

?3「……………」

?2「君たちその辺にしなよ。」

?4「そ、そうッスよ。今はもめてる場合じゃないッスよ。」

?「……………ちっ」

?3「ふん、今日は勘弁してやる」

?「今、戦っても、いいんだぞ?」

?3「面白い、相手になつてやる」

?5「よさねえか、お前ら。喧嘩ならどこかいてやれ」

?2「だから、今はもめてる場合じゃないって。」

?4「みんな、仲良くいくッスよ」

? 「……………」

? 3 「……………」

? 4 「さあ、握手ッスよ、握手。」

? 3 「……………」

トコトコ、

? 2 「あ、ちよつと待ってよ」

? 4 「何で、仲良くできないッスかね」

? 5 「さあな。」

? 「（人形め、俺の考えた計画をバカにしやがって）」

? 4 「何やってるんッスか？置いていくッスよ」

? 「（まあいい。あの馬鹿を殺して、違うやつを呼ぶか。どうせ、代わりは、たくさんある。）」

? 「バリン、ちよつといいか。」

バリン（? 3） 「なんだよ」

？「お前ら、先にいつてくれ」

？2「わかりました」

？4「早く来てくださいッスよ」

バリン「なんだよ、用っ．．．」

グサッ

バリン「！！！」

バシユッ

バリン「！！！！き、きさ．．．」

グサッ、バシユッ、グサッ、バシユッ、グサッ

バリン「や．．．め」

？「消えろ。」

ドーーーーーン！！

？「．．．」

？「（所詮、人形は人形か。）」

ピッ、ピッ、ピッ

？「俺だ、バリンが死んだ。早急に代わりをよこせ。今度はゴミを寄越すな。きちんとしたやつをよこせ。じゃな。」

？「やつ（人形）の代わりが来るまで、どうしようかな？・・・ルークとやらと、遊ぶか。いずれ戦うはめに合う。先に殺しておくか。奴らが奴を失えば、こつちの<sup>ルーク</sup>もんだ。」

ゾクッ、

「！..な、なんだ、この感覚は・・・」

（一種族部隊・拠点）

「ディオの兄貴に俺達の事を？」

『嘘、偽りなく、正直に話したよ。彼も疑わなかったよ。』

「そうか、それは、よかった。話がわかる奴で。」

『本当、よかったよ。やっぱり真実を言うのは気持ちいいね』

「兄貴は真実がほとんどだし、嘘はあまり言わないもんな。」

『……嘘は、そのうちバレ、その人からみんな離れていく。嘘はたった1つで絆を切らしてしまう可能性があるんだ……』

「兄貴？」

『（デイト君、偽りは……ほどほどに頼むよ……。君が必要なのは、僕達じゃない。リトルウィングの皆さんだよ）』

## 第二話：嘘と真実（終）

## 第二話：嘘と真実3（後書き）

第二話：嘘と真実終了です。

謎の5人の1人が死にましたね。今は4人ですが、また5人になります。

誤字、脱字がありましたら、教えてください。

## 2 1 行動開始（前書き）

第三話はもう少ししてからです。

ついに謎の5人の1人が行動開始。

どうぞ、ご覧ください。



## 2 1 行動開始

く???く?

ここに、2人の人がいた。何もなく、来ても意味のない場所。そして、

?「今日からお前は、俺達の仲間だ」

?3「バリンさんの代わりに、頑張ります。」

?「バリンの代わりにしないでいい、自分の力で頑張ってくれ。」

?3「わかりました」

?「敬語は使わなくていいぞ。さてと、あいつらの所に行くんだが、俺は用事がある。先に行ってくれ、場所はここだ。」

?3「了解!!」

?「また、後でな。」

くパルム大都市く

ここに、1人の青年がいた。惑星移動船（バスみたいな感じ）を間違えたので、パルムに戻って来たディオ。しかし、

「うーん、自室に忘れ物をした。」

「船はないし、taxi船に乗って、いやいや、ならクラッド6行きのbus船に乗るか、人ゴミに隠れて行った方がいいかも。依頼、最近多いから大丈夫だろ……。多分」っと心配したが、とりあえずリトルウィングに帰ることにしたディオ。そして、クラッド6行きのbus船に乗った。

くリトルウィング・ロビーく

「（やっぱり、人が多いな）」

リトルウィングに着いたディオ。そして、

「（ここでバレたら一巻の終わり、気を付けて進もう）」回りの目を気にしながら、自室に向かうディオ。そして、

「（やべ、バスクだ!!!）」　　と思わず、顔を反らす。

「んっ？」

「（き、気付かれたか？）」

「お前、」

「（終わった……）」

「こっちは、我々の家だぞ。<sup>マイルーム</sup> 事務所はあっちだ。」  
「と事務所を指す。」

「（あぶね）……コクリ」  
「と頷き、事務所を向かい振りをして、バスクが何処かに行ったのを確認すると、急いでマイルームに向かった。」

「あぶね、バレル所だった。とりあえず……大丈夫……だよな」  
「と不安はするが」

「とつとつ、済まして帰る」

「ルーク・マイルーム」

「プシュー」

「（よかった、開いたよ）」

自分のカギで開くか心配をしていた。何しろリトルウィングを飛び出してカギを変えたか心配をしたからだ。

「（俺がいつでも帰って来てもいいように、ってことか？）」「っと考えた。ルークのパートナーマシナリー（以後PM）は調整中だ。

「さつさと、持って帰ろ。」っと奥に進む……。だが

ゴト、

「！！？（誰だ？）」「っとディオは慎重に音をたてずに歩きそして音をした方へ顔を覗かせる。。

？「待ってたぜ、ルーク」

「！！？誰だ」

？「失踪したのに、ここにまさか帰って来るとは、勘を頼るものだ。」

「質問に答えろ！！」  
っとディオが言う。

？「口がわりいゝなあ。もう少し利口なしゃべり方をしろよ」「っとばかにした言い方で言う。

「お前も一緒だろ？」

？「俺はそんなに口は悪くない。」

「そんなことはいい、質問に答えろ！！」

？「声、出してもいいの？お前が帰って来たことがバレるぞ。」

「答えろって言ってるんだ。」

「仕方ない、俺の名前は、ルーティン。ルーティン、インガム。みての通りヒューマンだ」つと言うルーティン。

「偽名か？」つとディオ

「お前とは、違う。俺は偽らないからな。」

「！！！？なぜそれを？」

「教える、必要はない。どうせ死ぬんだ。ここで」

「俺をあまりなめない方がいいぞ。」つとシップウジンライを構える。

「やれやれ、こんな場所で戦うなんて・・・ま、いいか、どこで戦っても死ぬんだから。」つとルーティン

「なめるなって言ってるんだよ。」つとディオ。

「じゃ、戦ってみるか？もう、結果は分かるけど・・・」つと

い、武器を構える。

「なめるな!!」っとルーティンに襲い掛かる。しかし、

カッキーン

「ツツ!!」

「やるな」

手を上下に振る。どうやら手が痺れたらしい。

そして、少し離れるディオ。ルーティンが持っていたのは。

「なんだ、その武器？」

「これか？武器屋のオヤジに頼んで作ってもらった。その名も”ブラックソード”だ。」

「名前にセンスがねえな」

「はっはっはっは、名前より、その武器の効果さ」

「なに？」

「この武器は、相手の力を二倍を利用する武器だ。」

「なに？」

「分かりやすく言うと、お前の攻撃して、俺がお前の攻撃を受け止

めたでしょう。その受け止める威力の二倍＋俺の威力。更に攻撃の威力は、受け止めた威力の二倍＋俺の威力、つまりだ、お前の威力を二倍して利用をさせてもらって事だ。」

「そんな技術、聞いた事はない」

「そりゃそうさ、俺はこの世界の人間じゃねえからな。」

「なんだと？」

「この宇宙に、あの惑星だけではない。他にも惑星がある。宇宙は広いからな。それに、この世界の技術は……ゴミだ。」

「なんだと。」

「こんな技術じゃ、俺には勝てない。俺の世界の技術は、これ以上……いや、はるかに上だ。それに、グラール1位、2位の頭脳を持つ……えっと、エリアンだったか、リリアンだかわからねえが、俺の世界じゃ……クソだ。」

プチッ

ディオの方で何かがキレる音がした。

「てめえ……調子に乗るな！！俺をコケにしようとバカにしようとか構わねえが、仲間をバカにするな。エリアン？リリアン？相手の名前はエミリアだ！！」

「そうそう、その名前。あの頭脳じゃもっと努力が必要だ」

「もういい、貴様をここで殺す!!」

「面白い。来いよ。実力の差を見せてやる」

「俺をなめるな!!」

（リトルウィング事務所）

「帰ったか。」っとクラウチがエミリアが事務所に入ってきたのに気が付いた。ユートは修行をするって事で、村に送って帰った。

「……」エミリアはなにと言わない。

「大丈夫か？」っとクラウチが聞く。

コクリツ　　っとエミリアが頷く。クラウチはこれ以上聞かなかった。  
そこへ

プシュー

「帰ったぞ」っとデューマンの女性が入ってきた。

「ナギサか？どうだ？何か情報が手に入ったか？」っとクラウチが



ナギサに聞く。

「貴方に、通信で伝えた通りだ。」っとナギサは答えた。

「そうか……」

「それより、エミリアはどうした？元気が内容だが？」っとナギサが言う。

「ああ……」っとクラウチが言おうとしたが、しかし、

「実はね……。」っと エミリアが言った。

「エミリア」っとクラウチが言う。

「くよくよしても仕方ないもん。もう……過ぎた事だし……」

「

「?」

「ナギサ……実はね……。」っとエミリアが言おうとしたが、

ドタドタ、ドタドタ、

プシュー、

「た、た、た、大変です」リトルウィングの社員の男性が慌てて入

ってきた。

「なんだ、どうした？」っとクラウチ。

「どうかしたの？」

奥からウルスラとチエルシーが出てきた。

「ナニカ、あったノ？」

「ル、ル、ルークのマイルームの」

「ルークのマイルームでどうしたんだ！！」っとクラウチが聞く。

「ル、ル、ル、・・・ルークが血塗れで倒れてます」

「「「「「！！！！」」」」」

クラウチ、エミリア、ウルスラ、チエルシー、ナギサは、急いでルークのマイルームに向かった。

「ルーク・マイルーム」

「ルークー！！」っとエミリアが叫んだ。

しかし、

「「「「「！！！！」」」」」

あちこちに、血が飛び散っており、部屋は散らかり、壁にはキズや穴が空いている。さらにルーク（ディオですが、しばらく、ルークになります）の体に無数の傷が付いていた。

「ルーク！！」エミリアが呼んだが、返事はない。

「ルーク！！」

エミリアがルークに近寄り、身体を起こすが、

「エミリア！！あまり触るな！！」っとクラウチが言う。

「だって、だって」エミリアは涙を流している。

「クラウチ、とりあえず、ベッドに寝かせましょう。」

「わかった、チェルシー、事務所から医療用バックを持ってこい。  
ナギサは医者を呼べ」

「わかった」

「了解ネ」

2人が部屋を出る。

つとそこへ、

プシュー

「兄貴、遅かったみたいだぞ。」

「うん、彼らもついに動き出したみたいだね。」

「兄さん、それより早く応急措置をしないと」

「そうだね、医療用バックは持って来た？」

「ここにあるぜ。兄貴」

つと会話をしているのはディック、ソロ、ミケの3人だった。

「なんだ、てめえら。うちの社員じゃねえな。」つとクラウチが言った。

しかし、クラウチの話を無視し、応急措置をするディック。そして、

「よし、とりあえず応急措置は済んだ。病院に連れて行こう。」

「おい、入って来い。」の声の後に、ビーストの2人が入って来た。

「てめえら、無視すんな。」つと怒鳴るクラウチ。

「話してる暇はない。」つとソロが言う。

「ルークをどうするつもりだ。」

「どうするって、病院に連れて行くに決まってるじゃん」っとミケが言う。

「今は、ほんの応急措置をただけ。早くしないと、死ぬよ。」っとディック。

「てめえらを信用できるか。」っとクラウチ。

「早く行こうぜ兄貴。じゃないと本当に危ないぜ」

「そうだね。」っとルークを担架に乗せ、ビーストの2人が運び扉向かう。

そこへ、エミリアが扉の前に立ち塞がった。

## 2 1行動開始（後書き）

次回は第三話・・・ではありません。

誤字、脱字がありましたら教えてください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4736z/>

---

ファンタシースターポータブル2i～異世界の5人～

2011年12月28日20時48分発行